

キャラクター名  
クライ・ハイルキル

プレイヤー名

シンドローム	ブラックドッグ		ワークス	何でも屋	カヴァー	何でも屋
	ブラックドッグ					
オプション			年齢	34	性別	男
覚醒	渴望	衝動	破壊	初期侵食率	43	%
出自	名家の生まれ	経験	死と再生	邂逅	借り	

	基本値	ワークス	ボーナス	成長	他修正	能力値	HP	89
肉体	4	1	1			6	行動値	6
感覚	2	0	0			2	(非装備時)	6
精神	2	0	0			2	戦闘移動	11
社会	0	0	2			2	全力移動	22

肉体			感覚			精神			社会		
技能	SL	修正	技能	SL	修正	技能	SL	修正	技能	SL	修正
白兵	1		射撃			RC			交渉		
回避	1		知覚	1		意志			調達	1	
運転:			芸術:			知識:			情報: 噂話	1	
運転:			芸術:			知識:			情報:		
運転:			芸術:			知識:			情報:		
運転:			芸術:			知識:			情報:		
運転:			芸術:			知識:			情報:		

武器・コンボ	能力	命中値	G値	攻撃力	射程	メモ
秘密兵器:フォールンシールド	白兵	6r+1	8	2		ガードを行う間、G値+5。その度侵食率+2。

防具	価格	装甲	回避	行動	メモ
防弾防刃ジャケット	6	3			

所持品	
ダーマルプレート	

合計装甲: 3    合計回避: 0

ロイス				
対象	感情(pos)	感情(neg)	タリ	消費
秘密兵器《トイボックス》	P	N		
霧谷雄吾	P 好奇心	N 脅威		
初《協力者》	P 誠意	N 不信感		
エリザベート・ブラーシュ	P 感服	N 不快感		
三好 メキラ(廃都心中)	P 好奇心	N 嫉妬		
ルシエル	P 有為	N 不信感		
オンスロート	P 好意	N 恥辱		

最大財産P: 6    残り財産P:

スキル名	SL	コスト	タイミング	射程	対象	判定	制限	メモ
ワーディング	★	-	オート	視界	シーン	自動	-	
効果: 非オーヴァードのエキストラ化								
リザレクト	0	1d10	気絶時	-	自身	自動	↓100	
効果: コスト分のHPで復活								
ハードワイヤード	7		常時	至近	自身	自動		
効果: 専用アイテムをLv個常備。侵食率基本値+4。								
マグネットフォース	1	2	オート	至近	自身	自動		
効果: カバーリングを行う。これにより行動済みにならない。								
球電の盾	5	1	オート	至近	自身	自動		
効果: ガード値を+Lv×2。								
サイバーアーム	1		常時	至近	自身	自動		
効果: 攻撃力+[Lv+3]。G値+5。侵食率基本値+3。								
ペインエディター	4		常時	至近	自身	自動		
効果: HP最大値を+[Lv×5]。侵食率基本値+3。								
磁力結界	1	3	オート	至近	自身	自動		
効果: ガード値を+(Lv)D。								
電子使い	★		メジャー	至近	自身	自動		
効果: 電子機器無しで記録媒体の読み書きが可能。								
タッピング&オンエア	★		メジャー	視界	効果	自動		
効果: 無線を傍受したり逆に電波を放送し画像などを送受信する。								
効果:								
効果:								
効果:								
効果:								
効果:								

与えられた依頼は大体気分80%位で解決してくれる右腕が義手のマイペースな何でも屋。

その生まれは海外でも有名なオーヴァードの扱いに長けた一族の1つ、フィドルフセン家である。だが、彼は生まれた時から強力な異能力を持っておらず、無能力状態だった。そのため、家族からは一族の恥だと蔑まれ、しかしながらあの家の生まれということで家の外に出たら周りの人からちやほやされる人生を受けていた。そんな生活に嫌気が差した彼は、中学生の頃に家出をする。家出をする際に家にあった財産を使い、日本へと向かう(その際から名前は現在の偽名となっている)。日本での活動を広めるために3年間、言語の勉強をした。

17歳にて、現在の職である何でも屋を始める。とは言っても当時は表立った行動はしていなく、裏通りなどでひっそりと活動してた。更に当時は能力を持っているわけでもなかったので任務の成功率は半分かそれ以下だった。

23歳にて、依頼の成功率を上げたいと思った彼は、昔の両親又は親戚の能力使用時の頃を思い浮かべ見様見真似で真似をしてみた所、超微弱な電流を自分の手で生み出せるようになった(元々彼には才能が無いわけではなく、ただコツが掴めてなかっただけである)。しかし半年ほどしてもそれ以上能力が強くなることは無かった。

24歳にて、とある任務の最中で研究所に入った際、大事故に出会う。爆発に巻き込まれ、吹き飛ばされる様にして外に出た後、右腕が瓦礫の下敷きになる。出血も多く、右腕も壊死し、意識が朦朧としている中で、最初に見たのは自分と同年代くらいの女性、そしてそれから1分後くらいに見たのはここかの制服を着ていた人達であった…。

気づいた時にはいつもの自分の本拠地の前だった。意識が無くなった後何があったのかを覚えておらず、いつも通りの日常が過ごせると思った…自分の右腕の違和感に気づく前は。そう、彼の右腕は義手となっていたのだ。ある程度は人の腕の形をしつつ、しかしながらどこか機械らしさもある腕へと(あっアナタこの機会でご奇想だと感じまし